# 先は短いが 俺たちも一緒だ

## 宮内分会でOBとの懇親会

六月二十七日午後一時から、三池闘争当時宮内社宅の地域分会長だった千井慶来さんの呼びかけで現役組合員を囲む三池労組宮内社宅OB会が開かれました。

### 集った七十人

集まったOB会のメンバーは、北は福岡市内、南は天草など、広範囲に分散している元組合員四十人、元主婦会員二十二人、さらに現役組合員・主婦八人、あわせて七十人が千井さん宅の会場に集まり、文字通り立錐の余地もないほどの盛況ぶりでした。

この集まりは、毎年新茶の時期になると、きまって新茶を届けていた村上さんが、当時地域分会長だった千井さんとの雑談の中で、「当時の者が集まって話し合えば楽しかろうな……」といったのがきっかけ。

「俺の家は社宅より少しは広かけん四、五十人は集まれるばい。うちでよかったらいつでも使ってよかばい」ということで千井さんが呼びかけ人、村上さんが連絡員となってOB宅を一軒一軒回って呼びかけ、遠方の人たちには電話で通知したところ、待ってましたとばかりの喜びようで、午後一時開始の時刻を待ちきれず、朝早くから出てきて会場の準備を手伝う者、「チョット早めに出てきた」といいながら、十数年ぶりの再会を喜び合う者たちで、定刻には会場はいっぱい。

三池闘争当時の話や退職後の苦労話、お互いの体のこと、新築の家のことなど、話題はつきません。ビールで乾杯し、カラオケも飛び出し、予定していた時間（五時間）があっという間に経過しました。司会者が「話はつきないが一応のけじめをつけよう」との言葉に全員が起立し、〝雨の降る夜はつらかろね、ホッパーにらんで……〟と歌い出すみんなの瞳は輝いています。最後に組合歌をうたうときは、全員が二十年前の若さを取りもどし、大合唱でした。

### さらに連帯を

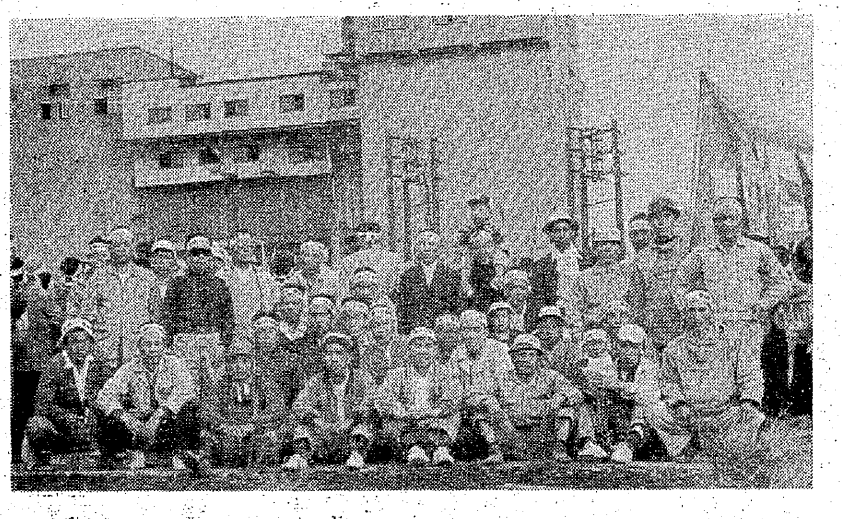
長老たちは口ぐちに言います。「現役分会員が少なくなればなるほど、OBとの連帯を強めて行かねば……」「俺たちは七十歳、いや八十歳に近い者もいる。老い先短いかもしれんが、三池労組員だった誇りだけは忘れんぞ」「宮内社宅の現役は少なくなりさびしいだろうが、俺たちもいっしょに闘っていることを忘れるんじゃないぞ」と。

聞きいる現役組合員が、喜びと感激に涙している顔を見ると、この姿にこの集会の意義が込められていることを感じました。そして再会を約して、それぞれの地に帰られた先輩たちの、後輩に対する思いやりの心にふれたこと、三池労組員であった誇りを忘れまいと誓い合ったことは、この集まりの成功を意味していると思います。

現役のみなさん、毎日のたたかい本当に大変だと思います。地域毎に、職場毎に、お互いが労働者としての連帯を深めるための集まりを数多くつくっていこうではありませんか。そして明日への希望を忘れず、たたかいの火を強めていきましょう。なお、遠距離のみなさんには連絡できなかったことをおわびいたします。

宮内地域分会OB会

（この項、下河延雄）



昭和35年、三川鉱ホッパー前で千井地域分会長以下の宮内地域分会の面々。

# 北海道にも きびしい囚人労働が

二十五分会（本所）　西山　正勝

ひょんなことから六月一日から北海道五日間の旅の機会を得た。かねてから〝春の北海道〟に一度は行ってみたいと思っていたところへ飛び込んだ朗報だった。この旅は、ある商店のツアーで二十四人が同行である。道内ではバスでの観光コース巡りであった。

広大な牧草の中に点在するサイロ。そして畜舎の日高地方を走り抜け、日高山脈を越えると十勝平野の高原地帯である。広びろとした畑の中に、幾何学的に畑の区切りであるかのように線状に植えられたエゾ松、トド松など、実は強い風から土を守るための防風林だという。その真ん中を凸凹もなく一直線に十七キロメートルもあるという道路を走り抜け、道東の阿寒、摩周などの湖と、まだ山肌に雪が残っていて、山岳美で織りなす景勝地の阿寒国立公園へ、つづいて歌謡曲で知られる知床半島へ、さらには映画〝番外地〟シリーズで有名になった網走へと急ぎ旅の三日間を過ごした。

四日目、網走から層雲峡→旭川→札幌といった行程である。網走から三十分も走ったろうかの、いわゆる士族授産と、北海道開拓を兼ね屯田兵を入れることが決められた。その先兵として道路をつくるための労働者が必要だ。そこで考えられたのが囚人労働であった。さっそく〝網走刑務所〟がつくられ、二十年から三十年、無期といった重刑者を送り込んでつくらせたのが今の国道三十九号線の前身である。

その労働は、酷寒の冬、足には鎖でつながれた大きな鎚を引きずりながら、飢と寒さに耐え銃口の監視の中での重労働であり、倒れる者はボロ布のように捨てられたという。網走に送られ、道路づくりに従事した囚人のほとんどがこのように捨てられていった。

後年、国道として整備拡張された際に、沿線のあちこちから足に鎖で鎚をつけたままの白骨体が出てきたということで、中でも三百体以上も掘り出された箇所があった。現在は、そこに白骨から鎖と鎚をはずして鎖塚として保存されている。また、白骨は一箇所に集め慰霊碑におさめられている、という話であった。

この話を聞いて、三池の囚人労働と考え合わせ、資本の、支配階層の本質を見たような感を強くして、五日間の旅を終えた。

バスガイドさんが「ただ今走っておりますのは国道三十九号線で、別名囚人道路と呼んでおります。それは……」という説明によると――。

明治のはじめの頃、廃藩置県により職を失い、混乱した武士

× ×

# 訴える平和の尊さ 『ひめゆりの塔』

## まだ見ていない方は、ぜひ……

二十九年前、同じ今井正監督の手で作られ、空前のヒットをした「ひめゆりの塔」の再映画化である。脚本も同じ水木洋子のもの。ただし今度は現地で長期ロケしたから臨場感は増したものの、その反面、時間がだいぶ経過して説明不足の面があること、出演俳優に戦争体験や飢餓体験がないだけ演技が上すべりしている面があることは否めない。

物語は、太平洋戦争末期の昭和二十年三月、軍の命令で野戦病院看護婦に配属された沖縄県立第一高女、同師範学校女子部の教員と生徒二百十七人が、米軍の攻撃で多くの犠牲者を出しながら南へ追いつめられ、摩文仁（まぶに）の洞くつで解散命令が出た三カ月後手投げ弾で自ら青春にピリオドをうつまでを今度はカラーでつづっている。

きな臭い国際情勢を反映してかいま戦争映画ブームである。公開中の「Uボート」、「南十字星」「ドッグ・ファイト」をはじめ、「未知への飛行」、「メガフォース」、「大日本帝国」と、今後の公開も目白押しだが、死に直面した人間の恐怖を描ききった作品は少ない。その点この作品は、病院とは名ばかりの薬もろくにない壕の内外にあふれる傷病兵や、恐怖から発狂したり、身を守るために狂暴化していく軍人などをリアルにとらえて、見るものの胸をしめつける。これと、献身的看護にあたる〝ひめゆり〟の乙女たち（古手川祐子、田中好子、大場久美子ら）と女教師（栗原小巻）らの束の間の明るさ、たとえば琉球舞踊を踊ったり、水浴を楽しんだりする場面を対照的に描き、戦争のむなしさ、悲惨さをクローズアップしたのが印象的だった。

沖縄復帰十周年のことし、沖縄の当時の状況や現状を改めて考えさせてくれる力作。（S）

× ×

「ひめゆりの塔」は、三池労組の文化統一行事として七月十一日に行われましたが、配布された券は上映期間中（三十日まで）有効です。この機会にぜひ観賞されるように。

釣りキチ余談　連載第九回

# あそびの巻

十九分会（三川）　石田　鈍竿

釣りに、ハリスの無精は禁物である。

『ぼつぼつ行こうか……』

三池灯台への夜釣りである。潮の満ち返しをねらい、汕の切れたペタルを踏んで三池海水浴場へ。

昔は、夜ともなれば涼客、遊泳、アベックなどで、昼間以上の賑わいをみせていた。

『相も変らず賑わいよるのオ……』

のん気なもので、自転車は砂浜に放置して、海水浴客を横目に見ながら、目指す灯台へ。

時間が早かったせいか、いいポイントに座って第一投。いい潮回りだ。

『今夜はいいぞう』と、ほくそ笑んでるうちに小さな魚信。すーっと送り込んで〝がくっ〟と合わせる。見事な手応えだ。

たて続けにハクラ、セイゴを数本釣り、調子に乗り過ぎハリスの傷もかまわず流したのがいけなかった。

次に掛けたやつの絞りの強さは抜群で、しまった、と後悔しても後のまつり。案の定、傷のところから〝ぷつん〟と切れてしまった。反動で捨て石の間にかえり込む始末で型なし。友人が横で、手助けもせずにやにや笑っている。

『こげんかとき笑わんちゃよかろもん』と当たりちらしたが誰れに文句の持って行きようもない。

失敗はあったが、型のいいのを上げたので満足し、早目に切り上げた。

『ちょっと一杯……どうな』衆議一決。海水浴場のバラックで、パンツ一枚になってビールを干していた。それも目的があってのことである。

午前一時頃になって、〝わいわい、がやがや〟。

『来たぞう……』

夜のつとめから開放され、自分の顔にもどったお嬢さんたちの涼行である。それだけに彼女たちは大胆になる。しかも若くて、はち切れそうな姿態はまばゆいばかりに俺たちに迫る。

『釣れたねエー』

『まあだ生きとるばい。誰れか刺身とらんかい、うまかぞう……』

ハクラの生きづくりとあっては、めったにお目にかかれない極上物だ。

若物同志のことである。たちまち意気投合し、お嬢さんたちの首に手を回し抱きよせ『乾杯っ』。

友人はグラマー二人にはさまれてグロッキー気味である。

興に乗って、得意中のナンバーワン、いま流行の「羽田発七時五十分」を、手振りよろしく歌えば〝やんや〟の拍手でたちまちキッス攻めに合う。

ハレムの王様になった気分で午前四時頃まで大騒ぎした。ざこ寝した朝、ビール代ほか何もかも彼女らが支払うといってきかないのである。

遊んだのか遊ばれたのか、なんだか変な気分でバイバイした。